

金谷治著『老荘的世界—淮南子の思想—』（「サーラ叢書」11・昭和34年1月15日・八京都市V平楽寺書店・二六四頁・五〇〇円）。

著者・金谷治氏については次項書評後記参照。

金谷 治著『孟子』書評

北 村 学

本書が著された目的は、「あとがき」に、

『孟子』はわたしの好きな書物である。その理由は立派な文章という形式的なこともあるが、主としては、そこからうかがえる孟子という人間像にかかわっている。わたしが本書で企てたことは、その人間像をできるだけ客観的に明らかにすることであつた。

とある。

まさに、その目的が、あざやかにしとげられているのである。

『孟子』をきわめて平易に、その概略を現代訳で、注に原典を引く場合にもすべて書き下し文を用いる等、だれでも親しめるよう、こまかい心づかいがゆきわたっている。しかも、それがいわゆる発展的な「動き」のすがたで、時間的な系列のうえにのせて、生き生きと写されているのである。

いわば、読み物としての楽しさに通じるものがある。といつてももとより、それは学問的にしかと裏づけられたもので、著者の「恣意」のかけなどはみじんもない。

「余論『孟子』七篇について」で明らかにされているように、崔

東壁の『孟子事実録』にならい、「梁惠王篇」が七編中に占める意義を説き、まず『史記』列伝の誤り——孟子遊歴の順が「齊・梁」と逆である点——を正し、戦国諸子の記述と対比して、時代的背景をうかがひあがらせ、種々のエピソードも加えて、現実主義、実利主義、権謀術数の世の中に、「王道」の高い理想を掲げ、強い情熱で、その実現のため諸王の間を遍歴し、ついに志を得ずして、郷里に退き、門人の教育に晩年を終えるまでの経緯が、つぶさに描き出される。読者はおのずと、かつて孔子の歩んだ道を、思いうかべずにはいられまい。

人間の善意を信じ、「四端の説」より「養氣」に至る過程が、流れるがごとく説きあかされている。

性の善悪の問題は、『論語』にも「夫子之言性与天道、不可得而聞也己矣」とあるように、孔子も明言を避けたところで、ただちに「善」と断じざるのは、難点があるにしても、孔子の志を学ぶことを念願とした孟子にとっては、それは、もはや動かしがたい信条であり、韓退之をして「孔子伝之孟軻」と、また、程子をして「孟子性善、養氣之論、皆前聖所未發」といわしめたゆえんで

あろう。

結果は、世に合わず、ついに現実の政治的活動から身を引くに至ったことも、著者は「それは決して単純な敗北の過程ではない。それは、一つの理想を守りつらぬく歩みであり、むしろ精神の高らかな勝利を歌うものであった。」とする。

著者は『孟子』を愛している。とはいえ、その論理の不十分なところも明白に指摘する。その上に、著者のあたたかい眼が、いつも注がれ、孟子その人の「真のすがた」がうきぼりにされる。

とかく、中国の古典、特に思想的なものの解説は、無味乾燥になる。発想の心情を軽視して、一部の体系の欠如でむやみに過小評価したり、逆に、体系化しようとして、無理な解釈を加えて、その本意から逸脱したりする。

また、伝記といえ、ただ厳肅な一面を写して、人間味を失った、冷たい姿に作りあげがちである。

こうした従来の欠陥を「払拭」して、孟子の人と思想を的確に――さきの著者のことばどおり、「客観的に明らかに」されているのである。

『史記』列伝の簡にすぎることやうらみとする人は多からう。本書は、そうした世の渴望をいやすものといえよう。

本書の構成は、

序章

第一章 孟子とその時代

第二章 道徳はつらぬかれるか

第三章 王道の悲願

第四章 民を尊しとなす

第五章 人の本性は善だ

第六章 聖人への道

第七章 理想主義の勝利

余篇 『孟子』七篇について

あとがき

字句索引

人名・書名索引

以上のとおりで、特に「余論」は必読の文字である。

金谷治著『孟子』（「岩波新書」青版五九八・昭和42年6月20日

・二〇〇ページ・一五〇円）

著者・金谷（旧姓・多気田）治氏は、本学専門部国語漢文学科昭

和16年卒業、東北大学文学部卒業。現職・東北大学文学部（中

国哲学）教授。文学博士。